

# AFTERNOON TEA

## なにわの浦島太郎—海のそばの大学で—

森ノ宮医療大学保健医療学部臨床工学科

五十嵐淳介

香川大学の神鳥和代先生よりバトンを受け取りました、五十嵐淳介と申します。私は1997年まで大阪大学、2002年まで米国ハーバード大学、2017年まで香川大学に所属したのち、大阪市住之江区にある森ノ宮医療大学に移って参りました。二十年ぶりに大阪に戻った勘定になります。現在は本学医療技術学部臨床工学科に所属し、臨床工学技士・理学療法士・臨床検査技師その他さまざまな医療職を志す学生さんたちに対して、生理学・内科学などの教育を担当しております。

さて私たちの森ノ宮医療大学は開学2007年と若い大学で、ご存じない方も多いと存じます。せっかくの機会ですので今回は本学と、本学が所在している大阪南港（ベイエリア）について、少し紹介させていただきます。

本学の母体となった「大阪鍼灸専門学校」は大阪市の東側、大阪城からもほど近い城東区にありました。しかし四年制大学を開設する際に、将来を見越して広い土地を手に入れようということで、現在の場所を選んだのだそうです（図1の囲み部分、google map利用）。実際に開学時には二学科体制だったものが七学科体制に拡大しており、毎年のように新しい建物ができています。自分の所属する組織ながら、当時の経営陣の慧眼には感心します。

この場所は「咲洲（さきしま）」という人工島で、バブル経済崩壊後長年利用が進まなかった地域です。着任時私もそのような認識だったのですが、この十年くらいでマンションが立ち並び、人もずいぶん増えました。本学のごく近くには大阪府庁の入る超高層ビルもあり（図2）、市内中心部から通勤してくる人も多いです。本学の南側は広いコインパーキングでしたが、昨年から複数の民間企

業がオフィス棟の建設を始めています。本学では、地下鉄の最寄り駅は「コスモスクエア」という駅になります。ここは海に面しており、晴れていると夕陽が見えて少しよい気分になります。

咲洲から目を移すと、コスモスクエアから地下鉄で一駅の「大阪港」駅は天保山地区の最寄りであり、ここは市内でも有数の観光地です。特に有名なのは世界最大級の水族館である「海遊館」ですが、ほかにも大阪湾岸の遊覧船や観覧車など、たくさんの施設があります。また「咲洲」と海をはさんだ向かい側には「夢洲」という人工島があります。ここでは2025年に、大阪・関西万博が開催される予定です。現在はコンテナヤードが立ち並ぶだけですが（図3）、いずれ工事が始まるのでしょう。香川から大阪に戻るときは、勤務先のすぐ隣で万博が開催されるなど想像もしていませんでした。どんなことになるのか、いまから楽しみです。

コロナ禍前の退勤時、コスモスクエアから市内方面の地下鉄では、私も含めて人生にいささか疲れたおじさん・おばさんたちと、海遊館から帰ってくる元気いっぱいの子供さんや若いカップルが異様なコントラストをなしていました。外国人の方も本当に多かったです。コロナ禍三年目、まだいろいろなものが正常化いたしません、せめて万博の頃には、もう少しいろいろとともに戻ってほしいものです。

末筆になりますが、2022年春の生理学会大会におかれましては、コロナ禍に加えて会期中の地震によって本当に大変な運営を強いられたものと拝察いたします。心より感謝申し上げる次第です。次の大会でこそ、対面で学会会員の皆様にお目にかかれればと念じております。

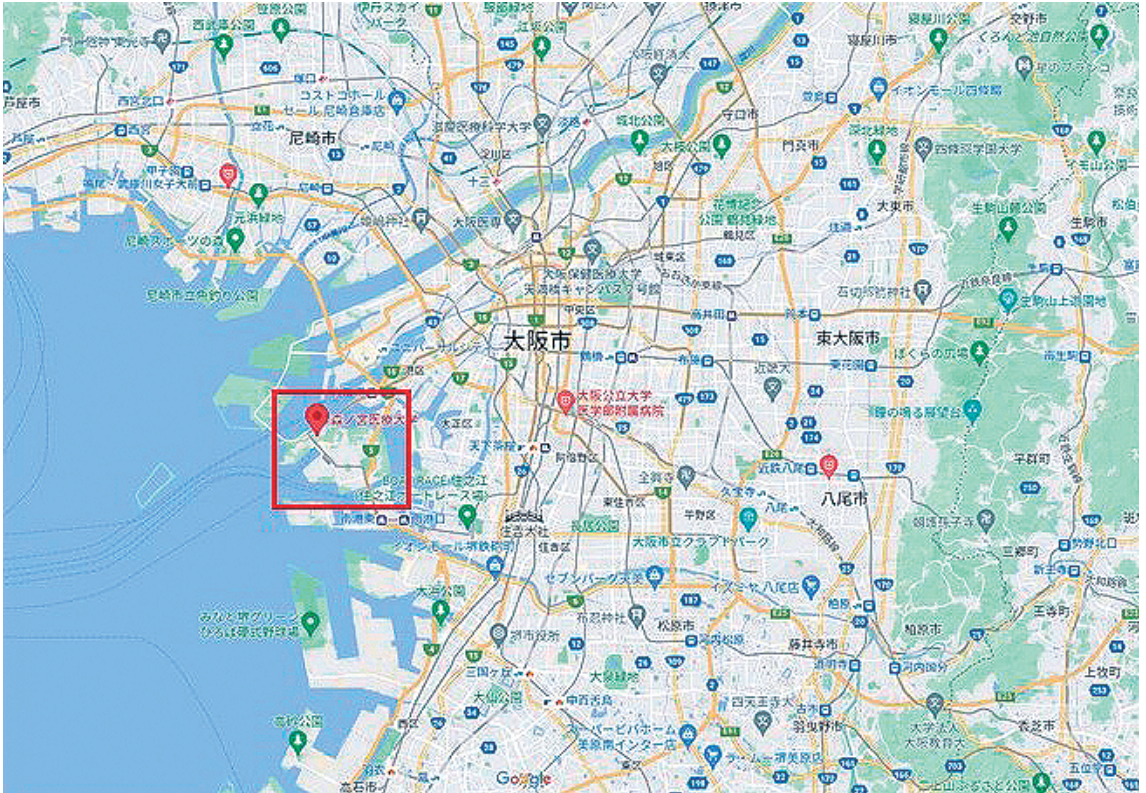


図 1



図 2

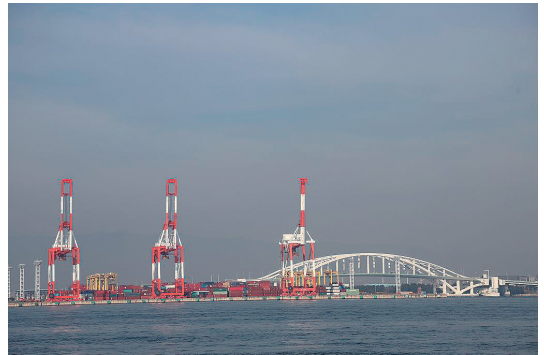


図 3



## 生理学への道

兵庫医科大学生理学神経生理部門

古賀 浩平

山梨大学薬理学の繁富英治先生からバトンをいただきました。繁富先生の事は知り合いになる前から先生の論文を読んで知っていました。直接お話しする機会ができたのは、研究助成の発表会でした。それからは、お互いに生理学会に所属していることから仲良くしていただいています。先生からはいつも刺激を受けていて、生理学会の期間中にお酒が飲めるのをいつも楽しみにしています。

Afternoon Teaの内容は自由ということなので、今思い浮かんだことを書きたいと思います。私はこの前まで自分を若手と思っていましたが、気づくともう45歳になり完全に中堅の年齢になってしまいました。時間の流れは本当に早いです。中堅の主な役割に学生への指導や教育があるのではないのでしょうか？これまで自分の研究を中心に考えてきたので大きな変化です。兵庫医科大学に赴任してから大学院生と一緒に研究をしており、これまで修士の学生1人と研究を行いました。現在は、共同研究を行っている矢尾育子先生（関西学院大学）の修士学生2人と研究をしています。学生に対して教育や指導と呼べる立派なものが出てきているかは正直分かりませんが、学生と一緒に研究する中で、自分が研究を始めた頃のことを良く思い返します。先生方には、出来が良くない私に対して丁寧に辛抱強くご指導いただきました。これまで多くの先生や先輩にお世話になってきましたが、ページの都合上、学部生から修士までの話を振り返りたいと思います。

当時、福岡大学薬学部の3年生であった私は、教室配属先を決める時期でした。どの教室に入ろうか考えていた時に薬理学実習がありました。どの実習内容も面白かったのですが、何故か腸管の実習を担当した先生のことを思い浮かべていました。この「腸管の先生」は熱心でしかもユーモアを交えて教えてくれたのが印象的でした。何かこの先生は面白そうだなと思い、第一希望を薬理学



腸管の先生（左）と著者（右）（居酒屋にて撮影）。20年経った今も先生から助言をいただいています。

教室にしました。この教室は人気が高かったのですが、抽選の結果、運よく薬理学教室に入ることができました。さらに運よく、「腸管の先生」に直接ご指導いただくことになりました。先生の研究テーマは痛みで、マウスの脊髄に薬物を投与する髄腔内投与を行い、鎮痛のメカニズムを行動薬理的に調べていました。先生は本当に楽しそうに研究をする人で、大人が夢中になる研究者という職業はどのようなものか興味がわきました。一緒に実験をして、休憩時間はタバコを吸って、データがまとまった時はお酒を飲みながら話すことが楽しみでした。私も研究が面白くなり、そのまま修士課程に進学し、ひたすら髄腔内投与をしました。このまま博士課程に進学して先生と一緒に研究がしたいと思い進路を相談したところ、「本気で研究者になりたいなら、身体の仕組みを知る生理学を身に付けた方が良い」。さらに、「他の大学も選択肢に入れて考えた方が良い」と言われました。それを聞いた時は、正直、突き放されたような気持ちになったのを覚えています。話の中で、もし先生なら「九州大学医学部生理学の吉村恵教授の講座に行きたい」と聞いて、良く考えた結果、博

士課程から九州大学に進学することを決めました。これが私にとっての生理学への入り口です。博士課程からは、生理学の難しさを存分に味わいました。中堅になった今も生理学の奥深さを感じながら研究を続けています。

このようにして‘腸管の先生’に導いていただ

いた生理学への道ですが、あの時に先生と出会い数多くの助言をいただいたから今の私があると感謝しています。今度は私が一緒に研究をしてくれる学生の成長を少しでも手助けしていきたいと思っています。



## コロナ禍で始めたこと

防衛医科大学校・生理学講座

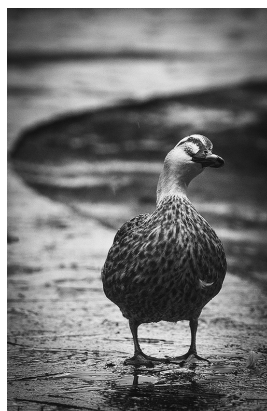
石渡 遼

こんにちは。防衛医科大学校・生理学講座の石渡と申します。鶴見大学の吹田憲治先生よりバトンを受け取り、寄稿させていただきます。吹田先生は、私が博士課程で所属していた横浜市立大学・循環制御医学講座で当時研究されており、場を和ませる存在感で学生達に慕われる存在です。私自身も当時からとても親切にいただき、また、異動されてからもシンポジウムの企画や今回の寄稿にもお誘いいただきました。ご縁に感謝いたします。

さて私は、大動脈瘤などの血管疾患の発症機序や、血管病態モデルの作成など、血管平滑筋の解析を中心とした研究に携わってきました。現在の所属に移ってからは、血管石灰化の発症機序等について研究を行っています。このテーマについては新参者ですので、生理学会でもよく勉強させて頂いております。また、発表させて頂く機会があれば、ご助言等頂けますと幸いです。

突然ですが、コロナ禍で新しく始めたことはあるでしょうか？ 私は密にならずに一人でもできる趣味として、写真を撮ることにハマりました。遠出もできないし、街中にも出掛けにくい、といった当時の状況下でも何か気分転換のためにできることはないかと考えていたところ、旅行用に購入したカメラがただの装飾になっていたことに気づいた訳です。運動不足の解消にもなるかと始めてみると、色々な気づきがありました。ここにはこんな花が咲くのか、ですとか、あのカラスにはよ

くここで会うな、ですとか、ここにパン屋があったのか、これまで気にも留めていなかったことに



写真を撮ることで初めて近所でも色々な発見がありました。顕微鏡の撮影も少し上手くなったかも？

気づき、近所の解像度がどんどん上がってくる感覚がありました。気づけば、週末になるとカメラをもって近所や近場の公園を散策することが習慣となりました。最初は自己満足で完結していたのですが、研究者の性なのか、凝り性な性格な故か、写真雑誌への投稿にチャレンジするようにもなりました。当初は箸にも棒にも掛からぬ状況でしたが、最近はまれに予選を通過するようになってきました。未だに写真雑誌の誌面を飾る夢は達成されておらず、毎号、入賞された方の写真を眺めながら感嘆するばかりですが、リジェクトにめげない心持ちは、研究生生活で身に付けた大切なものだと思います。これからもアクセプトを目指して細く長く続けてみようと思います。

最後に、私事で恐縮ですが、今年の2月に第一子となる長男が産まれました。現在まで無事にムチムチに育っていますが、妻の分娩時には兄の命が危なかったかもしれない、という経験をしまし

た。陣痛の開始から分娩までが短い時間で進んでしまい、回旋異常もあったためです。医師や助産師、看護師の迅速な処置のおかげで事なきを得ましたが、退院して元気な我が子に実際会えるまでは心中穏やかではなかったです（コロナの影響で出産の立ち会いや入院中の面会はできませんでした）。受精から発生、成長、分娩を経て産まれてくることは奇跡的だと実感するとともに、医療の進歩や医療従事者の方々に改めて感謝するきっかけとなりました。私自身は2歳の時に川崎病に罹患しており、後に親から「心臓に爆弾を抱えていたかもしれなかった」と聞かされ、子供心に恐怖に感じたことをよく覚えています（今なら、冠動脈の瘤のことで云々、と逆に説明し始めてウザイこと請け合いです）。基礎医学に携わる者として、こういった不安の解消につながるような発見に貢献できればと夢をみつっ、今日もゲル撮影機のシャッターを切るのです。